

灰谷健次郎観文学にみられる教育観*

永野優希(学籍番号 200721545)

研究指導教員：黒古一夫

副研究指導教員：綿抜豊昭

1. 序章 研究動機

灰谷健次郎は児童文学作家として広く知られる。その作品には、社会的弱者に寄り添う教育者としての姿勢が常に表れている。そして、人としての普遍的な「やさしさ」を主張する灰谷作品は多くの支持を得た。しかし、彼の理想は現代に向けられたものであるにもかかわらず、作品において現代社会が抱える諸問題の認識に欠ける点が多く見られた。本論文では、社会的背景と作品に描かれた「子ども観」「沖縄観」「農業・漁業観」「家族観」、そして、それらを包括する「教育観」を分析し、戦後教育と共に歩んできた灰谷文学の、社会に与えた影響と限界について考察する。

2. 一章 灰谷健次郎という人物

2.1 その家族と少年時代

1934年、神戸市の貧困家庭の7人兄弟の三男に生まれる。終戦で崩壊状態にあった日本経済は朝鮮戦争をきっかけに成長期へ向かったが、灰谷健次郎は中学校卒業後、三菱造船所で働く。この底辺労働者生活において、灰谷の戦後民主主義精神の土壌が育ってゆく。

2.2 小学校教師時代

1956年から神戸市の小学校教師を勤める。

* “The thought of education on Haitani Kenjiro’s literary works” by Yuki NAGANO

高度成長期の学歴偏重社会において、灰谷は作文教育を実践し、それらは児童雑誌『きりん』に掲載もされた。しかし、受験戦争、兄の自死、『笑いの影』(1962年)を差別小説として部落解放同盟に糾弾されたことに行き詰まり、1972年に辞職する。

2.3 児童文学作家時代

辞職後の旅で、灰谷は沖縄の人々の「やさしさ」に癒され、それを子どもの「やさしさ」と重ねて『兎の眼』(1974年)と『太陽の子』(1978年)を発表、好評を博した。以後、児童文学作家として活動を続ける。自給自足に憧れて、1980年に兵庫県淡路島に、1991年には沖縄県渡嘉敷島に移り住む。また1983年に神戸市に太陽の子保育園を設立した。『天の瞳あすなる編Ⅱ』(2004年)以降の著作は未完のまま、2006年11月に、72歳で他界する。

3. 二章 教師と児童文学観・子ども観

3.1 理想を「外」に求める教師

灰谷作品において、農業共同体や離島など特殊な環境下で教育の「希望」が描かれるのは、彼自身の学校を去った体験と自然回帰願望によるものと思われる。しかし、現実の教育問題は学校現場で頻発し、そこでの解決を求められる。灰谷が現場の外に描く「希望」の先には実現の可能性が見えない。

3.2 完全な人間としての「子ども」観

辞職時にさまざまな絶望を抱えていた灰谷は、沖縄の人々と子どもの「やさしさ」に救われたという。しかしこの体験によって、沖縄の歴史問題、子どもの教育問題、灰谷自身の底辺労働者生活が混同され、「子どもは社会的弱者すべてにやさしい」という灰谷の「子ども観」が作られていると考えられる。

4. 三章 「いい人」という「虚像」

灰谷は主に「沖縄」「農業」「漁業」「障害者」などをモチーフとして描く。それらの人々は常に「子どもの味方」でもあるという立場を明確にしている。しかし、彼らが抱えている問題を孕む現代社会の構造自体に深く言及することはない。これは、灰谷が人気作家として成功し、社会問題と直に向き合うことがなくなっていったためであると考えられる。

5. 四章 「家族」の本質と「自立」

『我利馬の船出』(1986年)には、互いを映す家族とは嫌でも向き合わざるを得ない、という「家族の本質」に触れた描写が見られる。しかし、自立に対する灰谷の認識は曖昧である。現代社会で子どもが経済的にも社会的にも自立することは難しい。彼は終戦期の中卒労働者体験から子どもの自立を表現したが、物質的に恵まれた高度成長期以降の子どもたちの実態を捉えることができなかった。そして、『我利馬の船出』(1986年)や『はるかニライ・カナイ』(1975年)や『少女の器』(1989年)に描かれる子どもたちの逃避はまた、貧困家庭や学校や都会からの灰谷自身の逃避とも重なる。

6. 終章 「教育観」が「反体制」の一部であることの総括

灰谷がめざしたのは戦後の社会の理想像であり、「子ども」「沖縄の人」「お百姓・漁師」「障害者」を体制に抵抗する善、そして「学校管理職」「都会の人間」を体制側の悪として、民主主義運動を作品に反映させた。しかしそれは現代の複雑に絡み合った社会構造を、善と悪という二元論でしか捉えられなかった灰谷文学の限界を露呈することになった。

また、戦前の臣民教育に対し、戦後日本は人間教育を掲げ個人の尊重を目指した。その中で灰谷は、社会的弱者に注目し「子どもに学ぶ教育」を主張した。しかし、戦後日本の高度経済成長は、内にこもる排他的な子どもたちを作り出した。ニートの増加、学びや労働から逃走する子どもたちは、大量消費時代における教育理念の限界を象徴しているといえる。そして灰谷もまた、自立した個人による民主社会を目指しながらも、視野狭窄に陥り、その全体像を見失う。民主主義運動の中で生まれ、多くの人々に読まれ影響を与えてきた灰谷文学は、今日の若者を覆う自己中心的な世界観の形成を、結果的に助長することになった。戦後の民主主義教育と灰谷文学が提示した壁をどう乗り越えるか、21世紀社会の中で模索し続けることを今後の課題としたい。

文献

- [1] 黒古一夫:灰谷健次郎—その「文学」と「優しさ」の陥穽, 河出書房新社, 2004.
- [2] 長谷川潮編:論叢児童文化, くさむら社, 33号, p.35-40, 2008.